

歴代誌第二33-36章「主へのへりくだり」

1A 捕囚からの回復 33

1B 主の宮での悪 1-9

2B 悔い改めの実 10-17

2A 霊的復興 34-35

1B 律法の朗読 34

1C 偶像の除去 1-7

2C 衣を裂くヨシヤ 8-28

3C 契約の言葉 29-33

2B 過越の祭り 35

1C 定め通りの奉仕 1-19

2C 神に逆らう戦い 20-27

3A へりくだらぬ後の滅び 36

1B 宮の器具の持ち去り 1-21

2B 宮の再建 22-23

本文

歴代誌第二 33 章からです。今日でついに、歴代誌全体が終わります。私たちは、ずっとユダ王国の歴史を学んでいて、いかに御霊の中に留まり続けるのが大きな課題であるかを知りました。ヒゼキヤ王がアッシリヤからの救いを経験して、それから彼は高ぶってしまいました。自分が主の恵みの下に生きていたはずなのに、それが自分のものだといつの間にか思ってしまう、こうした肉の弱さを私たちは持っています。そして、ヒゼキヤ後のユダの歴史をこれから読みます。

1A 捕囚からの回復 33

1B 主の宮での悪 1-9

33:1 マナセは十二歳で王となり、エルサレムで五十五年間、王であった。33:2 彼は、主がイスラエル人の前から追い払われた異邦の民の忌みきらうべきならわしをまねて、主の目の前に悪を行なった。33:3 彼は、父ヒゼキヤが取りこわした高き所を築き直し、バアルのために祭壇を立て、アシェラ像を造り、天の万象を拝み、これに仕えた。33:4 彼は、主がかつて、「エルサレムにわたしの名がとこしえにあるように。」と言われた主の宮に、祭壇を築いたのである。33:5 こうして、彼は、主の宮の二つの庭に、天の万象のために、祭壇を築いた。

前回も話しましたが、ユダの国の終わりに差しかかって、二つの大きな流れができました。一つは、極悪です。これまでになかった悪をユダの王が行い始めたことです。一人はアハズ、そしてもう一人はここに出てくるマナセです。次に、これまでになかった霊的復興を経験します。高き所を取り除いたヒゼキヤ、そしてマナセの孫、ヨシヤです。終わりの日も同じように、罪が極みに達する時であると同時に、主に立ち上がる、これまでになかった霊的復興をする時でもあります。

マナセもアハズと同じように、カナン人の行っていた慣わしを行うようになりました。そして、午前礼拝で話したように父が行った宗教改革の反対を行いました。高き所を築き直したのです。逆宗教改革です。そして、バアルという権力の神、アシェラという性の神、それから天の万象を拝みます。星占いです。現代の社会に、この三つがすべてありますね。そして、これを主の宮で行っていた、というのがマナセの特徴です。これについて歴代誌の著者が書きながら、驚愕を隠していません。

コリントにある教会の一部に、風俗に通う者たちがいました。そこで、パウロはそれがどれほど忌まわしいことかを、次の言葉で表しています。「あなたがたのからだはキリストのからだの一部であることを、知らないのですか。キリストのからだを取って遊女のからだとするのですか。そんなことは絶対に許されません。遊女と交われば、一つからだになることを知らないのですか。「ふたりの者は一心同体となる。」と言われていたからです。しかし、主と交われば、一つ霊となるのです。不品行を避けなさい。人が犯す罪はすべて、からだの外のもので、不品行を行なう者は、自分のからだに対して罪を犯すのです。あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから自分のからだをもって、神の栄光を現わしなさい。(1コリント 6:15-20)」かつては神殿は建物でしたが、今は聖霊が私たちの肉体に住んでいてくださいます。したがって、遊女と交わるのは主ご自身が遊女といっしょにいることになり、これは絶対にあってはならないことです。

33:6 また、彼はベン・ヒノムの谷で、自分の子どもたちに火の中をくぐらせ、ト占をし、まじないをし、呪術を行ない、霊媒や口寄せをして、主の目の前に悪を行ない、主の怒りを引き起こした。

かつてアハズが行ったこと、子供たちを火の中にくぐらせることを行なわせて、さらにト占や霊媒など、オカルトにもはまりました。

33:7 さらに、彼は自分が造った偶像の彫像を神の宮に安置した。神はかつてこの宮について、ダビデとその子ソロモンに言われた。「わたしは、この宮に、わたしがイスラエルの全部族の中から選んだエルサレムに、わたしの名をとこしえに置く。33:8 もし彼らが、わたしの命じたすべてのこと、わたしがモーセを通して与えたすべての律法とおきてと定めとを、守り行ないさえするなら、わたしは、もう二度と、わたしがあなたがたの先祖たちのものと定めた地から、イスラエルを取り除かない。」

最後の、「イスラエルを取り除かない」は、直訳は「イスラエルの足を移さない」です。ソロモンの時に、イスラエルがその土地から取り除かれたことはありません。

33:9 しかし、マナセはユダとエルサレムの住民を迷わせて、主がイスラエル人の前で根絶やしにされた異邦人よりも、さらに悪いことを行なわせた。

マナセの悪は、午前話しましたように、自分が悪を行っただけでなく、それを住民に唆したことにあり

ます。そしてもう一つ、カナン人よりもさらに悪いことをさせた、とあります。現に、神の民の間で、一般の人々よりも悪いことが起こります。

2B 悔い改めの実 10-17

33:10 主はマナセとその民に語られたが、彼らは聞こうとしなかった。33:11 そこで、主はアッシリヤの王の配下にある將軍たちを彼らのところに連れて来られた。彼らはマナセを鉤で捕え、青銅の足かせにつないで、バビロンへ引いて行った。33:12 しかし、悩みを身に受けたとき、彼はその神、主に嘆願し、その父祖の神の前に大いにへりくだって、33:13 神に祈ったので、神は彼の願いを聞き入れ、その切なる求めを聞いて、彼をエルサレムの彼の王国に戻された。こうして、マナセは、主こそ神であることを知った。

私たちは歴代誌の最後で、ユダの民がバビロンに捕え移される姿を見ます。けれども神は、すでにマナセを、まだアッシリヤの支配下ですが、同じバビロン地方に捕え移されるのを許されました。そしてマナセは大いにへりくだりました。そして、神は彼の祈りを聞かれました。そして王国は彼のもとに戻りました。ここに、実は希望がありました。神がユダの国を滅ぼすと言われましたが、実はマナセの例があり、マナセのようにへりくだれば、神は憐れんでくださり、引き戻してくださるという事例を見せてくださったのです。この神の見本に倣えばよかったのですが、その後のユダの民は学習しませんでした。

私たちは今、恵みに時代にいます。マナセのように神の大いなる憐れみを見て、自分もへりくだり、祈り求めるなら、自分がここまで落ちてしまったと言っても、神は元のところに、いやそれ以上に引き上げてくださいます。パウロがこのことを自分の例を挙げて話しています。「「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に来られた。」ということばは、まことであり、そのまま受け入れるに値するものです。私はその罪人のかしらです。しかし、そのような私があわれみを受けたのは、イエス・キリストが、今後彼を信じて永遠のいのちを得ようとしている人々の見本にしようと、まず私に対してこの上ない寛容を示してくださったからです。(1テモテ 1:15-16)」

33:14 その後、彼はダビデの町に外側の城壁を築いた。それはギホンの西側の谷の中に、さらには、魚の門の入口に達し、オフエルを取り巻いた。彼はこれを非常に高く築き上げた。そして、彼はすべてのユダの城壁のある町々に將校を置いた。

父ヒゼキヤが城壁による防備を固めたのと同じように、マナセも行いました。「彼はこれを非常に高く築き上げた。」とありますが、今、エルサレムの旧市街に、非常に高い壁の跡があります。ヒゼキヤが立てたものだと言われています。幅が七メートルぐらい、高さが八メートルもあるという巨大なものです。

33:15 さらに、彼は主の宮から外国の神々と偶像、および、彼が主の宮のある山とエルサレムに築いたすべての祭壇を取り除いて、町の外に投げ捨てた。33:16 そして、主の祭壇を築き、その上で和解のいけにえと感謝のいけにえをささげ、ユダに命じてイスラエルの神、主に仕えさせた。

マナセには、へりくだりと悔い改めの実を見ることができます。へりくだったと言っても、その時だけの口だけの告白ではなく、行いが伴っていました。真実な信仰、真実な悔い改めには、必ず行いが伴います。

33:17 しかし、民は、彼らの神、主にではあったが、高き所でなおいけにえをささげていた。

高き所と言いますと、そのまま偶像礼拝だと思ってしまうかもしれませんが、ソロモンが神殿を建てる前は、このように高き所で主に対していけにえを捧げていました。だから、必ずしも偶像とは限りません。けれども、主の命令に逆らいます。なぜなら、神がご自分の名をソロモンの建てる神殿に置くと言われた時からは、勝手なところでいけにえを捧げてはならないと神は戒めておられたからです。それは、神は無意味に規則を設けられたのではなく、周囲の異教徒たちも同じように高き所でいけにえを捧げていたので、その影響を受けてしまうからです。

これを別の言い方をすれば、「自分のやり方で主を礼拝する。」ということができます。私たちは、神に召されて礼拝しています。自分の方法で礼拝するのではなく、神が呼ばれたから礼拝しています。中心は神であり、自分ではありません。けれども、自分にやり方があって、自分がやりたいように礼拝したい、自分の必要を満たすことが第一の礼拝、愛し、仕えるのではなく、愛されて、仕えられることだけを求める信仰生活や教会生活は、高き所で主を礼拝していると言えるでしょう。主を礼拝しているつもりが、自分がその座に着いてしまっているのです、すぐに偶像化します。

33:18 マナセのその他の業績、彼が神にささげたその祈り、イスラエルの神、主の名によって彼に語った先見者たちのことばは、まさしくイスラエルの王たちの言行録にある。33:19 彼の祈り、その願いが聞き入れられたこと、および、彼がへりくだる前に犯したその罪、その不信の罪、高き所を築き、アシェラ像と刻んだ像を立てた場所については、ホザイの言行録にまさしく記されている。33:20 マナセは彼の先祖たちとともに眠り、人々は彼をその家に葬った。彼の子アモンが代わって王となった。

王たちの墓ではなく、彼の家に人々は葬りました。たとえ悔い改めても、それまで行ってきた悪に対する結果は残存していました。ちょうどこれは、殺人者が刑務所で悔い改めても、その被害者と遺族、またその地域の人々に残した禍根はあるからです。その人は、神の前で完全に罪が赦されて、神はその人をキリストにあって受け入れてくださいます。しかし、ある人がこう言いました。「釘は抜くことはできるが、抜いた跡は残る。」

33:21 アモンは二十二歳で王となり、エルサレムで二年間、王であった。33:22 彼は、その父マナセが行なったように、主の目の前に悪を行なった。彼は、その父マナセが造ったすべての刻んだ像にいけにえをささげ、これに仕えた。33:23 彼はその父マナセがへりくだったようには、主の前にへりくだらず、かえって、彼アモンは罪過を大きくした。33:24 彼の家来たちは彼に謀反を起こし、その宮殿の中で彼を殺した。33:25 しかし、民衆はアモン王に謀反を起こした者をみな打ち殺した。民衆はアモンの子ヨシヤを代わりに王とした。

マナセの息子はアモンです。再び、「へりくだる」という言葉が出てきます。今日の聖書箇所、歴代誌第二の最後の四章のキーワードは、「へりくだり」です。以前、お話ししましたが、それは人に対するへりくだりと違います。もちろん、神の前にへりくだる人は他者を尊び、自分を誇りません。けれども、へりくだりは本質的に、神の前で行うものです。そして、へりくだりは、神への従順を伴います。「しかし、神は、さらに豊かな恵みを与えてくださいます。ですから、こう言われています。「神は、高ぶる者を退け、へりくだる者に恵みをお授けになる。」ですから、神に従いなさい。そして、悪魔に立ち向かいなさい。そうすれば、悪魔はあなたがたから逃げ去ります。(ヤコブ 4:6-7)」

けれども、アモンは自分のしたいことをしました。父マナセが刻んだ像にいけにえをささげ、これに仕えたのです。それで、他の主の目に悪を行ったユダの王と同じように、家来によって暗殺されています。そしてこれまでのユダの王と同じように、その暗殺した家来たちを忠実な者たちが殺します。

2A 霊的復興 34-35

1B 律法の朗読 34

1C 偶像の除去 1-7

34:1 ヨシヤは八歳で王となり、エルサレムで三十一年間、王であった。

非常に若い、八歳で王となりました。父アモンが殺されたので、そうせざるを得なかったのです。

34:2 彼は主の目にかなうことを行なって、先祖ダビデの道に歩み、右にも左にもそれなかった。34:3 彼の治世の第八年に、彼はまだ若かったが、その先祖ダビデの神に求め始め、第十二年に、ユダとエルサレムをきよめ始めて、高き所、アシェラ像、刻んだ像、および、鑄物の像を除いた。

若いのに、ヨシヤは主を求め始め、神の民の王としてしなければいけないことを行ない始めました。二十歳の時に偶像を取り除き始めました。

34:4 人々は彼の面前で、バアルの祭壇を取りこわした。彼は、その上にあった香の台を切り倒し、アシェラ像と刻んだ像と鑄物の像を打ちこわし、粉々に砕いて、これらのいけにえをささげた者たちの墓の上にまき散らした。34:5 彼は、祭司たちの骨を彼らの祭壇の上で焼いて、ユダとエルサレムをきよめた。

ヨシヤの宗教改革の方法は、異教の祭壇を汚すことでした。モーセの律法の中にも、死体に触れる者は汚れる、というのがあります。同じように、死体の上に砕いた像をまき散らすか、その反対に異教の祭司たちを取り除いて、その骨を祭壇の上で焼きました。このことによって、物理的にではなく、儀式的にも二度と、それを使って祭壇を造ることができないようにさせました。

34:6 彼は、マナセ、エフライム、シメオン、さらにはナフタリの町々でも、至る所で、彼らの剣を用いて同様にした。34:7 イスラエルの全地で、祭壇を取りこわし、アシェラ像と刻んだ像を粉々に砕き、すべての香の台を切り倒してから、彼はエルサレムに帰った。

ヒゼキヤと同じように、ヨシヤの改革は北イスラエルにも及びます。この時には、アッシリヤの力がほとんど弱まっています。バビロンが強くなっていて、パレスチナ地方は地政学的に空洞ができていました。ですから、そこは誰かが支配している土地という感じでなくなっていました。それで比較的自由に、北イスラエルであったところで活動ができました。

2C 衣を裂くヨシヤ 8-28

34:8 この地とこの宮とをきよめたのは、彼の治世の第十八年で、彼は、その神、主の宮を修理するため、アツアルヤの子シャファン、この町のつかさまアセヤ、エホアハズの子参議ヨアフを遣わした。34:9 彼らは、大祭司ヒルキヤのもとに来て、神の宮に納められた金を渡した。これは入口を守るレビ人が、マナセとエフライム、すべてのイスラエルの残りの者、全ユダとベニヤミンから集めたものである。それから、彼らはエルサレムに帰って、34:10 主の宮で工事している監督者たちの手に渡し、さらにそれを主の宮で行なわれる工事をしている者たちに渡して、宮を繕い、修理させた。34:11 彼らは、木工や建築師たちに渡して、切り石やつなぎ材を買わせ、ユダの王たちが荒らした家々に、梁を置いて、これを建てさせた。

偶像を取り除いただけでなく、主の宮を修理しました。これは、私たちに当てはめるなら、罪をやめるだけでなく、主への礼拝を回復させるということでもあります。かつても宮修理は行っていましたね。エホヤダが祭司であった時の王ヨアシユが、同じようにして金を集めてそれを宮の修理金にあてがいました。

34:12 この人々は、この仕事を忠実に行なった。彼らの上には、監督者、メマリ族のレビ人やハテとオバデヤ、ケハテ族のゼカリヤとメシュラムがいて、指揮をした。また、すべて楽器を奏するのに巧みなレビ人がいた。34:13 彼らはまた、荷をになう者たちをもつかさどり、各分野の仕事に当たるすべての職人たちの指揮をする役目についた。レビ人の中には、書記、つかさ、門衛などもいた。

歴代誌はレビ人の奉仕を際だって取り上げています。宮の修復工事を監督していたのは、レビ人です。自分たちが奉仕をしているところを修理しているのですから、当たり前と言えば当たり前です。けれども、「この仕事を忠実に行った」とあります。主への奉仕を忠実に行うこと、管理すること、これは神から与えられた命令です。

34:14 彼らが、主の宮に携え入れられた金を取り出していたとき、祭司ヒルキヤは、モーセを通して示された主の律法の書を発見した。34:15 そのときすぐ、ヒルキヤは書記シャファンに対してこう言った。「私は主の宮で律法の書を見つけました。」ヒルキヤがその書物をシャファンに渡すと、34:16 シャファンは、その書物を王のもとに携えて行き、さらに王に報告して言った。「しもべにゆだねられたことは、すべてやらせております。34:17 彼らは主の宮にあった金を箱からあけて、これを監督者たちの手に、工事をしている者たちの手に渡しました。」

モーセの律法が埋もれていました。これも皮肉なことですが、ヨシャパテの時代には祭司やレビ人に律法を持たせて、それをユダの町々で読み、説き明かすことを命じていました。ところが、律法を開か

ずにはばらく経っていたのです。しかも、申命記に、王は祭司によって律法を聞かなければならないと神は命じておられました。「彼がその王国の王座に着くようになったなら、レビ人の祭司たちの前のものから、自分のために、このみおしえを書き写して、自分の手もとに置き、一生の間、これを読まなければならない。それは、彼の神、主を恐れ、このみおしえのすべてのことばとこれらのおきてとを守り行なうことを学ぶためである。(17:18-19)」

34:18 ついで、書記シャファンは王に告げて、言った。「祭司ヒルキヤが私に一つの書物を渡してくれました。」そして、シャファンは王の前でそれを朗読した。34:19 王は律法のことばを聞いたとき、自分の衣を裂いた。34:20 王はヒルキヤ、シャファンの子アヒカム、ミカの子アブドン、書記シャファン、王の家来アサヤに命じて言った。34:21 「行って、見つかった書物のことばについて、私のため、イスラエルとユダの残りの者のために、主のみこころを求めなさい。私たちの先祖が、主のことばを守らず、すべてこの書にしるされているとおりに行なわなかったため、私たちの上に注がれた主の憤りは激しいから。」

ヨシヤの心の衝撃は只ならぬものがありました。自分たちがやっていることが、まさに神が憤りを注ぐと言われた背信行為ではないか、と悟ったのです。ヤコブの手紙で、神のことばが鏡に例えられています。「みことばを聞いても行なわない人がいるなら、その人は自分の生まれつきの顔を鏡で見る人のようです。自分をながめてから立ち去ると、すぐにそれがどのようであったかを忘れてしまいます。ところが、完全な律法、すなわち自由の律法を一心に見つめて離れない人は、すぐに忘れる聞き手にはならないで、事を実行する人になります。こういう人は、その行ないによって祝福されます。(ヤコブ 1:23-25)」

鏡を見ているように、神の御言葉は自分自身がどうなっているかを教えてくれます。私たちは、神の言葉を読まなければ、自分の心がどうなっているのかさえも分かりません。自分のことは分かっている、と思っているのですが、朝に御言葉を開くと、すっかり忘れていたこと、見失っていたこと、警告、慰め、あらゆる発見をします。霊的な栄養がそこで注がれます。心が主の前でどうなっているのか、明らかにされるのです。だから、立ち止まって御言葉に聞く習慣は必ず必要です。

34:22 そこで、ヒルキヤ、および、王の指名した人々は、女預言者フルダのもとに行った。彼女は、ハスラの子トクハテの子、装束係シャルムの妻で、エルサレムの第二区に住んでいた。彼らとその旨を彼女に伝えると、34:23 彼女は彼らに答えた。「イスラエルの神、主は、こう仰せられます。『あなたがたをわたしのもとに遣わした人に告げよ。34:24 主はこう仰せられる。見よ。わたしは、この場所とその住民の上にわざわいをもたらす。彼らがユダの王の前で読み上げた書物にしるされているすべてののろいをもたらす。34:25 彼らはわたしを捨て、ほかの神々に香をたき、彼らのすべての手のわざで、わたしの怒りを引き起こすようにした。わたしの憤りはこの場所に注がれ、消えることがない。』

女預言者フルダの預言です。ヨシヤが懸念していたことは、そのまま当たりました。主の憤りはそのままこの場所に注がれる、ということです。興味深いのは、ここで彼女が言っているのはモーセの律法そのものだからです。モーセの律法が言っていることが、その時代の彼らの状況に当てはまっている

ということであります。ですから、私たちにも、預言の賜物が御霊によって与えられます。もちろん、すべての人にではないですが、預言の言葉というものがあります。けれども、そのほとんどは、今の状況に、この書かれた聖書の言葉を当てはめることなのです。

34:26 主に尋ねるために、あなたがたを遣わしたユダの王には、こう言わなければなりません。『あなたが聞いたことばについて、イスラエルの神、主は、こう仰せられます。34:27 あなたが、この場所とその住民についての神のことばを聞いたとき、あなたは心を痛め、神の前にへりくだり、わたしの前にへりくだって自分の衣を裂き、わたしの前で泣いたので、わたしもまた、あなたの願いを聞き入れる。…主の御告げです。34:28 見よ。わたしは、あなたを先祖たちのもとに集めよう。あなたは安らかに自分の墓に集められる。それで、あなたは自分の目で、わたしがこの場所とその住民にもたらすすべてのわざわいを見ることがない。』彼らはそれを王に報告した。

マナセが大いにへりくだり、アモンはへりくだらず、そしてヨシヤはへりくださいました。「神の前にへりくだり」とあります。神のことばを聞くことによって、私たちは霊的復興を自分の生活で経験できます。神の御言葉によって、初めに「心を痛め」ます。今日の社会は、傷つけられたくないという空気に満ちています。最近のブログ記事で見たのは、男性が性欲よりも、プライドを優先させるというものでした。ナンパして、女性に振られるのが怖いのだそうです。もちろん性欲の捌け口とすることは情欲の罪ですが、人から傷つけられたくないという思いが強いです。しかし、愛というのは心を痛めることです。傷つくのは、心が柔らかいからです。主は、愛によって傷ついた心を必ず癒してくださいます。

そして、神の前にへりくだったら、「自分の衣」を裂いています。これは、心を引き裂くこと、嘆くことです。そして、主の前で「泣いた」とあります。主に対して私たちが、どれだけ泣いたでしょうか？自分の罪を悲しんでどれだけ泣いたでしょうか？また、人の罪を見て、執り成しの祈りを捧げて泣いているでしょうか？そして、このように祈ったので、主が彼の願いを聞いてくださっています。

しかし、それはユダが裁きを免れるというものではありませんでした。主がもたらす災いを見ることはない、という裁きの延長です。神は、ユダを裁かれることは変えられませんでした。列王記第二を見ますと、それはマナセが行った悪のためであると書いてあります。つまり、マナセが行ったことによってエルサレムの住民、ユダの民が罪から離れられなくなった、一切、悔い改めることができなくなった、自らを滅ぼすまで罪を行いつづけることが、神は予め分かっておられたからです。

ヨシヤのように、私たちはたとえ自分自身が主に対して精一杯、仕えていても、自分の周りの環境のすべてを変えられるのではないのだ、ということが分かります。しかし、主から与えられているその残された機会の中で、御霊に満たされて、周りの人々を主に導こうとする、個人に与えられた召しを全うすることはできます。そして、終わりの日、主が戻ってこられるのが遅いように感じられる時、それは、悔い改める者を、忍耐をもって待っておられるからだと言徒ペテロは言います。「主は、ある人たちがおそいと思っているように、その約束のことを遅らせておられるではありません。かえって、あなたがたに対して忍耐深くあられるのであって、ひとりでも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。(2ペテロ 3:9)」

3C 契約の言葉 29-33

34:29 すると、王は使者を遣わして、ユダとエルサレムの長老をひとり残らず集めた。34:30 王は主の宮へ上って行った。ユダのすべての人、エルサレムの住民、祭司とレビ人、および、上の者も下の者も、すべての民が行った。そこで彼は主の宮で発見された契約の書のことばをみな、彼らに読み聞かせた。34:31 それから、王はその定め場所に立ち、主の前に契約を結び、主に従って歩み、心を尽くし、精神を尽くして、主の命令と、あかしと、おきてを守り、この書物にしるされている契約のことばを行なうことを誓った。34:32 彼はエルサレムとベニヤミンにいるすべての者を堅く立たせた。エルサレムの住民は、その父祖の神である神の契約に従って行動した。34:33 ヨシヤはイスラエル人の全地から、忌みきらうべきものを除き去り、イスラエルにいるすべての者を、その神、主に仕えさせた。彼の生きている間、彼らはその父祖の神、主に従う道からはずれなかった。

ヨシヤは、モーセの契約に立つ誓いを立てました。大事な言葉は、31 節の主語です。「それから、王は」とあります。彼はユダの民に対して、主と契約を結ぶことを命じたのではなく、彼自身が人々の前で手本になるように、自分自身が主と契約を結びました。先に 21 節で、主のみこころを求めなさいとヨシヤは命じていますが、「私のため、イスラエルとユダの残りの者のために」と言っています。まず自分が主と歩み、それを手本にイスラエルの民も主に従うようにさせました。

これが霊的な権威、リーダーシップです。支配するのではなく、模範になることによって導くことです。パウロが、手紙の中で何度となく、「兄弟たち。私を見ならう者になってください。また、あなたがたと同じように私たちを手本として歩んでいる人たちに、目を留めてください。(ピリピ 3:17)」と自分を手本にしてくださいと言っています。当時、無律法主義、つまり、救われたのだから自分の好きなようにしても天国に行けるのだとしている教師たちがいたからです。それで、自分が教えていることだけでなく、自分の生き方も見て、それに倣ってほしいと懇願しています。教えるだけでなく、見せることによって教えました。

そして、もう一つヨシヤは、主が、彼の生きている間、災いが行いようになると約束されたのに、それでもなおのこと、主との契約を結び、その悔い改めにふさわしい歩みをしたこと、いや、その約束の前から正しい生活をしていたのに、律法の朗読によって罪示され、なおのこと正しく行きました。実は、悔い改める人は、「いや、この人は悔い改めなくても良いのではないか」と人間的に考える人のほうが、悔い改めます。それだけ、へりくだっているのです。そして悔い改める必要があると思える人が、なおのこと主の言うことを聞かない、ということがあります。

2B 過越の祭り 35

1C 定め通りの奉仕 1-19

35:1 さて、ヨシヤはエルサレムで主に過越のいけにえをささげた。人々は第一の月の十四日に過越のいけにえをほふった。

ヒゼキヤに引き続き、ヨシヤも過越の祭りを復活させました。ヒゼキヤの時は、宮清めをするのに時間がかかり、神が定められた期日である第一の十四日に間に合わず、第二の十四日にしましたが、ヨ

シヤは期日通りに行くことができました。

35:2 彼は祭司たちを任命してその任務につかせ、彼らを力づけて、主の宮の奉仕に当たらせた。
35:3 それから、彼は、全イスラエルを教え導く者であり、主の聖なる者であるレビ人たちに言った。「聖なる箱を、イスラエルの王ダビデの子ソロモンが建てた宮に据えなさい。もう、あなたがたにとって肩の重荷にはなるまい。そこで今、あなたがたの神、主と、主の民イスラエルに仕えなさい。35:4 イスラエルの王ダビデの文書およびその子ソロモンの書きつけのとおり、父祖の家ごとに、組分けに従って、用意をなさい。35:5 あなたがたの同胞であるこの民の者たちが属している父祖の家の区分に従って、聖所に立ちなさい。レビ人にとって、一族の分があるようにしなさい。35:6 それから、過越のいけにえをほふり、身を聖別し、あなたがたの同胞のために用意をして、モーセを通して示された主のことばのとおりに行ないなさい。」

過越の祭りを定められたとおりに行うには、とてつもない計画と奉仕が必要であることをヨシヤは分かっていました。それで祭司とレビ人と主の宮の奉仕に当たらせるために力づけています。まずしなければいけなかったことは、聖なる箱を宮に据えることです。「あれっ、至聖所にあったはずじゃない？」と思われたと思います。おそらく、アハズあるいはマナセが箱を動かしてしまったのだと思われます。律法をしっかりと読んだヨシヤは、契約の箱がすべての中心であることを知っていました。そして、ダビデが定めた組み分けにしたがって奉仕の用意をします。それから、過越のいけにえをほふります。

35:7 ヨシヤは民の者たちに羊の群れ、すなわち、子羊とやぎの子を贈った。すべては、そこにいたすべての人の過越のいけにえのためであった。その数は三万、牛は三千。これらは王の財産の中から出された。35:8 彼のつかさたちも、民および祭司たち、レビ人たちに、進んでささげるささげ物として贈り物をした。神の宮のつかさ、ヒルキヤ、ゼカリヤ、エヒエルも、祭司たちに過越のいけにえとして羊二千六百頭、牛三百頭を与えた。35:9 さらに、レビ人のつかさたち、すなわち、カナヌヤとその兄弟シェマヤ、ネタヌエル、およびハシャブヤ、エイエル、エホザバデも、レビ人に過越のいけにえとして羊五千頭、牛五百頭を贈った。

ヒゼキヤも自分の財産からいけにえを用意しましたが、頭数はヨシヤのが圧倒的に多いです。ヒゼキヤが捧げたのは雄牛一千頭、羊七千頭でした(30:24)。それはヒゼキヤの献身が少なかったというよりも、羊や牛をほふる祭司の奉仕が少なかったこともあります。30章を読み返しますと、本当に急いで用意したという雰囲気を感じ取りますが、ヨシヤのほうは、律法の規定にしたがって秩序正しく、十分に整えた感じを受けます。それから、ヒゼキヤの場合はつかさたちもいけにえを用意しましたが、ヨシヤの場合は、祭司とレビ人自身が自分たちの家畜から民のために用意しました。

35:10 こうして、奉仕の用意ができたので、王の命令のとおり、祭司たちはおのおのの定め場所に立ち、レビ人はおのおのの組分けに従って立った。35:11 彼らが過越のいけにえをほふると、祭司たちは彼らの手から血を受け取って注ぎかけ、レビ人は皮をはいだ。35:12 それから、彼らは全焼のいけにえを取り除き、これを民の者たちの父祖の家の各区分に渡し、モーセの書にしるされているとおりに主にささげさせた。牛についても同様にした。35:13 それから、彼らは定めのとおり、過越の

いけにえに火を加えて調理し、聖別されたささげ物を、なべ、かま、平なべなどで調理して、民たち全員のもとに急いで運んだ。

全焼のいけにえをまず捧げ、それを取り除いてから、過越のいけにえを火で調理します。過越の子羊は、火で焼いて、それから各家庭に一頭ずつ配布します。

35:14 そのあとで、彼らは自分たちや祭司たちのための用意をした。アロンの子らである祭司たちは、夜になるまで、全焼のいけにえと脂肪をささげていたからである。そこでレビ人は、自分たちや、アロンの子らである祭司たちのための用意をした。35:15 アサフの子らである歌うたいたちは、ダビデ、アサフ、ヘマン、および、王の先見者エドンの命令のとおり、その役目についていた。また、門衛たちは、それぞれの門を守っていた。彼らのうちだれも、その奉仕を離れる必要がなかった。彼らの同族であるレビ人が彼らのための用意をしたからである。

民のためだけでなく、奉仕者である彼ら自身のいけにえです。ともすると奉仕している者たちが、礼拝できなくなるということが起こりますが、彼らはきちんと自分たちのいけにえも捧げました。そして、こうした彼らが奉仕の場を離れなくても、それを受け取れるように他のレビ人が運んできます。

35:16 こうして、この日に、すべて主への奉仕の用意ができ、ヨシヤ王の命令のとおり、過越のいけにえをささげ、主の祭壇で全焼のいけにえをささげるばかりになったので、35:17 そこにいたイスラエル人は、そのとき、過越のいけにえをささげ、七日間、種を入れないパンの祭りを行なった。35:18 預言者サムエルの時代からこのかた、イスラエルでこのような過越のいけにえがささげられたことはなかった。イスラエルのどの王も、ここでヨシヤが行ない、祭司たちとレビ人、および、そこにいた全ユダとイスラエル、さらに、エルサレムの住民たちがささげたような過越のいけにえをささげたことはなかった。35:19 ヨシヤの治世の第十八年に、この過越のいけにえがささげられた。

これはすごいことです。ヒゼキヤによる過越の祭りは、ソロモンの時以来のものであった、とありました(30:26)。けれども、ここでは、「預言者サムエルの時代」ということです。つまり、ダビデよりも大きな過越の祭りでした。

2C 神に逆らう戦い 20-27

そして驚くことに、このヨシヤでさえ最後、愚かなことを行なってしまい、三十九歳という若さで死んでしまいます。

35:20 すべてこのように、ヨシヤが宮を整えて後、エジプトの王ネコが、ユーフラテス河畔のカルケミシュで戦うために上って来た。そこでヨシヤは、彼を迎え撃ちに出て行った。35:21 ところが、ネコは彼のもとに使者を遣わして言った。「ユダの王よ。私とあなたと何の関係があるのですか。きょうは、あなたを攻めに来たものではありません。私の戦う家へ行くところなのです。神は、早く行けと命じておられます。私とともにおられる神に逆らわずに、控えていなさい。さもなければ、神があなたを滅ぼされます。」35:22 しかし、ヨシヤは身を引かず、かえって、彼と戦おうとして変装し、神の御口から出たネコ

のことばを聞かなかった。そして、メギドの平地で戦うために行った。35:23 射手たちがヨシヤ王を射たとき、王は家来たちに言った。「私を降ろしてくれ。傷を負ったのだ。」35:24 そこで、家来たちは彼を戦車から降ろし、彼の持っていた第二の車に乗せた。そして、彼をエルサレムに連れ帰った。彼は死んだので、その先祖たちの墓に葬られた。全ユダとエルサレムはヨシヤのために喪に服した。

カルケミシュの戦いというのが、紀元前 605 年に起こりました。ここにあるように、カルケミシュというのはユーフラテスの上流の河畔にあります。今のシリアとトルコの国境をまたいで遺跡があります。この戦いによって、大きな地政学の動きがありました。アッシリヤが弱体していました。バビロンが台頭していました。612 年には、首都ニネベが陥落しました。残党が逃げて移住したのがカルケミシュです。バビロンが強くなるのを恐れたエジプトは、何度となくアッシリヤの援護に行きました。バビロンが強くなり、精力を南に拡げるのを防ぐためです。そこでエジプトのパロで、ネコという人物がカルケミシュに向かうため北上します。けれども、なぜかヨシヤがその手を阻もうとするのです。

ところで、ヨシヤが戦ったところはメギドです。海沿いの道からエジプトの王が北上すると、必ずイズレエル平原を横切りますが、その入り口にある要塞がメギドです。ここが古代から戦闘が繰り広げられており、メギドの丘、すなわちハルマゲドンにおいて、全世界の王たちが神とキリストに反抗して戦うために集結します。

話を戻しますと、ネコはもちろん、異教徒です。彼はイスラエルの神、主を知りません。それにも関わらず、彼は神の主権によって預言しました。彼は自分のエジプトの神のことを思って語ったのかもしれませんが、それがそのままイスラエルの神の言葉になっていたのです。「神があなたを滅ぼされる。」と言いました。以前、アマツヤというユダの王が同じ過ちを犯したのを思い出せますか？エドムに打ち勝ったので、北イスラエルのヨアシユに対して「決着をつけよう」と言いました。ヨアシユは、主の目に悪を行った王と列王記には書いていますが、それでも彼が言った言葉は主からのものでした。「家にとどまりなさい。」ということです。分を弁えなさい、とたしなめたのにアマツヤは戦いに来たので、ヨアシユは徹底的にアマツヤを打ちのめしました。時に、神は未信者をも用いて、ご自分の警告や戒めを語られることがあります。

けれども、ヨシヤは身を引きませんでした。そして彼が、確かに神に逆らったということが、矢を射られた時の様子で伺えます。変装したのに、矢が射られて戦車の中で倒れたのです。そうです、あのアハブと同じように死んでいるのです。

ヨシヤは霊的指導者で留まる続けることができなかった、と言えます。ネコに歯止めをかけたことは、何らかの政治的思惑があったのではないかと思います。おそらく、せつかくアッシリヤが弱体化しているのに、それを強化することに対する反対があったでしょう。また、エジプトの勢力圏がユダにまで及ぶのを阻もうとする思惑もあったことでしょう。いずれにしても、これまで律法に従うことだけに注意を寄せていたヨシヤが、世の指導者と変わらぬことを行なってしまったことです。

私たちも、いつの間にかそのようなことをしていないでしょうか？主の名によって行っていることが、

御霊によって導かれました。けれども、目の前に立ちはだかる障壁があります。これは、取り除かないといけないと思います。けれども実は、その障壁が主から与えられたものなのです。自分は霊的だというぬぼれから、相手が間違っていてそれを取り除かないといけないと思います。けれども、実は自分自身が主の御心を損なったのです。

35:25 エレミヤはヨシヤのために哀歌を作った。そして、男女の歌うたいはみな、今日に至るまで、彼らの哀歌の中でヨシヤのことを語り、これをイスラエルのために慣例としている。これらは哀歌にまさしくしるされている。35:26 ヨシヤのその他の業績、すなわち、主の律法にしるされているところに従った彼の忠実な行為、35:27 彼の業績は、最初から最後まで、イスラエルとユダの王たちの書にまさしくしるされている。

エレミヤが出てきています。イザヤはヒゼキヤと共にいた預言者でしたが、ヨシヤにはエレミヤがいました。エレミヤは、これからバビロンが滅ぼされ、その後もユダヤ人に預言をし続ける、涙の預言者です。エレミヤ書にも、ヨシヤのことが高く評価されています(22:15-16)。そしてゼカリヤ書には、イスラエル中がヨシヤのことで嘆き悲しんだことが書かれています(12:11)。ところでこの哀歌は、エレミヤ書の後の哀歌とは異なります。なぜなら、エレミヤ書の後の哀歌は、バビロンによって滅ぼされたエルサレムを泣き悲しんでいるからです。

3A へりくだらぬ後の滅び 36

これでヨシヤ亡き後、残るは神の憤りが下るのみです。覚えていますか、フルダの預言は、ヨシヤはモーセの律法に書いてある神の憤りを見ることなく死ぬ、というものでした。

1B 宮の器具の持ち去り 1-21

36:1 さて、この国の民は、ヨシヤの子エホアハズを選んで、彼の父に代えて、エルサレムで彼を王とした。36:2 エホアハズは二十三歳で王となり、エルサレムで三か月間、王であった。36:3 しかし、エジプトの王は、エルサレムで彼を退け、この国に、銀百タラントと金一タラントの科料を課した。36:4 ついで、エジプトの王は、彼の兄弟エルヤキムをユダとエルサレムの王とし、その名をエホヤキムと改めさせた。ネコは、その兄弟エホアハズを捕えて、エジプトへ連れて行った。

ユダの民が立てた王を、先ほどのネコが引きずり落としました。ネコには、カルケミシュの戦いで阻まれたという怒りがあります。ユダの主権を挫くために、自分が支配する傀儡のエホヤキムを立てました。そして重い科料を課しました。エホアハズは、エジプトに捕え移されます。

36:5 エホヤキムは二十五歳で王となり、エルサレムで十一年間、王であった。彼は、その神、主の目の前に悪を行なった。36:6 この彼のもとに、バビロンの王ネブカデネザルが攻め上って来て、彼を青銅の足かせにつなぎ、バビロンへ引いて行った。36:7 ネブカデネザルは、主の宮の器具をバビロンに持ち去り、バビロンにある彼の宮殿に置いた。36:8 エホヤキムのその他の業績、彼の行なった忌みきらうべきしわざ、彼について露見したことは、イスラエルとユダの王たちの書にまさしくしるされている。彼の子エホヤキンが代わって王となった。

エホヤキムの時に、第一回バビロン捕囚がありました。紀元前 605 年のことで、ネブカデネザルの治世、第一年の時です。列王記には記されていませんでしたが、エホヤキムはこの時に捕え移されています。けれども、彼はエルサレムの門の外まで引きずられてのたれ死ぬことがエレミヤ書 22 章 19 節で預言されており、バビロンから戻ってきたと思われまます。

歴代誌の著者が強調しているのは、主の宮の器具が持ち去られているということです。歴代誌が、神殿における礼拝が中心に書かれていることを思い出してください。ダビデが神殿建設の準備のために勢力を注ぎ、ソロモンがそれを完成させたところがイスラエル王国の頂点でした。それが、神の裁きによって神殿が破壊されていくことを克明に描いています。

36:9 エホヤキンは十八歳で王となり、エルサレムで三か月と十日の間、王であった。彼は主の目の前に悪を行なった。36:10 年が改まるに及んで、ネブカデネザル王は使者を遣わし、彼を主の宮にあった尊い器とともにバビロンに連れて行った。そして、エホヤキンの兄弟ゼデキヤをユダとエルサレムの王とした。

エホヤキが捕え移されます。エホヤキムの子なのですが、ネブカデネザルは傀儡を作るために、他のヨシヤの子と取り換えました。名前はゼデキヤです。そしてこれが、バビロン第二次捕囚になります。紀元前 597 年のことです。今、言いましたように、主の宮の尊い器がバビロンに連れて行かれたことが書いてあります。

36:11 ゼデキヤは二十一歳で王となり、エルサレムで十一年間、王であった。36:12 彼はその神、主の目の前に悪を行ない、主のことばを告げた預言者エレミヤの前にへりくだらなかつた。36:13 彼はまた、ネブカデネザルが、彼に、神にかけて誓わせたにもかかわらず、この王に反逆した。このように、彼はうなじのこわい者となり、心を閉ざして、イスラエルの神、主に立ち返らなかつた。36:14 そのうえ、祭司長全員と民も、異邦の民の、忌みきらうべきすべてのならわしをまねて、不信に不信を重ね、主がエルサレムで聖別された主の宮を汚した。36:15 彼らの父祖の神、主は、彼らのもとに、使者たちを遣わし、早くからしきりに使いを遣わされた。それは、ご自分の民と、ご自分の御住まいをあわれまれたからである。36:16 ところが、彼らは神の使者たちを笑いものにし、そのみことばを侮り、その預言者たちをばかにしたので、ついに、主の激しい憤りが、その民に対して積み重ねられ、もはや、いやされることがないまでになった。

歴代誌の著者は、この最後の王について、彼がエレミヤの預言にへりくだらなかつたことを強調しています。主の言葉に対して、へりくだりませんでした。マナセは大いにへりくだりました。アモンはへりくだらなかつたので、すぐに殺されました。そして、ヨシヤは正しく歩んだのに、なおのことへりくだりました。ゼデキヤとユダの民の姿勢は、私たちの肉と神の言葉との確執であります。自分はこれをして、と強く願っています。それを主は、「違う！」と拒まれます。それでも、やります。神の言葉の前にへりくだっていないのです。

そして、ネブカデネザルが神にかけて誓わせた、とありますが、これもイスラエルの神の許しがあっ

てのことです。不信者であるネブカデネザルを神がご自分の器としてゼデキヤを懲らしめておられたのに、かつてマナセはバビロンに連れて行かれて大いにへりくだったのに、ゼデキヤは反抗しました。

さらに、異教の慣わしを祭司までが行っています。理由は、やはり神の宮のことを気にしてのことです。もちろん、民のことも気にしておられます。主が、ご自身の名を置かれた宮を壊したくないというためらいがあり、彼らに使者たちを送られました。けれども、彼らは使者たちを笑いものにして、みことばを侮って、馬鹿にしました。

36:17 そこで、主は、彼らのもとにカルデア人の王を攻め上らせた。彼は、剣で、彼らのうちの若い男たちを、その聖所の家の中で殺した。若い男も若い女も、年寄りも老衰の者も容赦しなかった。主は、すべての者を彼の手に渡された。36:18 彼は、神の宮のすべての大小の器具、主の宮の財宝と、王とそのつかさたちの財宝、これらすべてをバビロンへ持ち去った。36:19 彼らは神の宮を焼き、エルサレムの城壁を取りこわした。その高殿を全部火で燃やし、その中の宝としていた器具を一つ残らず破壊した。36:20 彼は、剣をのがれた残りの者たちをバビロンへ捕え移した。こうして、彼らは、ペルシヤ王国が支配権を握るまで、彼とその子たちの奴隷となった。

列王記には書かれていなかったことが、ここに書かれています。気づかれましたか、そう、「ペルシヤ」です。歴代誌が、ペルシヤ国にいる帰還民によって書かれていることが確かであることを示す文章です。列王記では、神の裁きとしてのバビロン捕囚を強調していますが、歴代誌では、それは周知の事実であり、そこからいかに神がユダの民を回復してくださったのかを描いています。

36:21 これは、エレミヤにより告げられた主のことばが成就して、この地が安息を取り戻すためであった。この荒れ果てた時代を通じて、この地は七十年が満ちるまで安息を得た。

エレミヤが預言したのは、捕囚期間が七十年というものです。そして、これまた列王記にはない、新しい聖霊による理解が、歴代誌の著者に与えられました。それは、安息年のことです。「七年目は、地の全き休みの安息、すなわち主の安息となる。あなたの畑に種を蒔いたり、ぶどう畑の枝をおろしたりしてはならない。(レビ 25:4)」七年の七十倍ですから四百九十年です。どの地点からか分かりませんが、神はバビロン捕囚によって、民に対して裁きを与えるということと、またイスラエルの地をご自分のものとみなし、そこに安息を与えるという御心がありました。神は、一つの出来事を引き起こされる時に、私たちの思いをはるかに超えた、いろいろな目的を持っておられることが分かります。

エレミヤ書に入ったら学びますが、イスラエルがその地から引き抜かれるのは、再び植えられるためです。植えられるために引き抜かれます。ここが大事です。新しく生まれるためには、罪にあって死んでいることを認めなければいけないように、バビロンによって一度死ぬ必要がありました。

そして神の民になったクリスチャンも、イスラエルの民と同じような懲らしめを受ける時があります。「このような者をサタンに引き渡したのです。それは彼の肉が滅ぼされるためですが、それによって彼の霊が主の日に救われるためです。(1コリント 5:5)」この男は近親相姦の罪を大胆に犯していました

が、使徒パウロは彼が性病か何かでその肉体が減びるままにさせた、と言っています。肉体は減びるのですが、このことによってかえって霊が救われるようにするためだ、と言っています。キリスト者として、一般の人よりも悪いことをすることは可能なのです。イスラエルの民がそうでした。神はその時に、私たちに根本治療をするために、かなり大胆な切除手術をされます。それは救うためであり、いじめるためではありません。

2B 宮の再建 22-23

36:22 ペルシヤの王クロスの第一年に、エレミヤにより告げられた主のこぼを実現するために、主はペルシヤの王クロスの霊を奮い立たせたので、王は王国中におふれを出し、文書にして言った。

36:23 「ペルシヤの王クロスは言う。『天の神、主は、地のすべての王国を私に賜わった。この方はユダにあるエルサレムに、ご自分のために宮を建てることを私にゆだねられた。あなたがた、すべて主の民に属する者はだれでも、その神、主がその者とともにおられるように。その者は上って行くようにせよ。』」

エレミヤに告げられた言葉とは、七十年の捕囚期間の後に、神がユダヤ人を約束の地に帰還させてくださるという預言です。ここに書かれているクロスの言葉は、エズラ記の最初の言葉と全く同じです。帰還民のためのユダヤ史であることが、ここから分かります。そして歴代誌が、やはり神の宮に焦点を当てています。神の宮が回復します。クロス王がその命令を出します。

私たちが、神の宮の建て上げにどれだけの情熱を注いできたか、ユダの王たちの歴史と重ね合わせながら考えてみましょう。私たちにとっての神の宮は、この体です。この体によって何を行ってきたか？そして、神の宮はキリストの体そのもの、教会です。私たちが兄弟姉妹の間で、キリストの体としてどのように成長してきたのか？今日の学びのように、御言葉に従うへりくだりに基づいた生活であったかどうか？それとも、自分の必要が満たされる、仕えられることを求める、神の言葉を締め出すようなことをしてきたか？お祈りしましょう。